

1 技術・家庭科で願う豊かな学びの姿

技術・家庭科では「豊かな学びの姿」を次のようにまとめた。

- ① 生活に必要な基礎的・基本的な知識や技術について、これまでに習得した学習内容をいかしつつ発達段階に応じた内容を確実に習得しようとする姿。(基礎・基本の習得)
- ② 実際の遊びや生活の中で遊びや生活をより豊かにするため、習得した知識や技術を活用し、生活の中の課題に気付き自ら解決しようとする姿。(基礎・基本の活用と課題の解決)
- ③ 集団の中の一員として、共に学び互いに協力し、高まり合いながら学ぶ姿。(集団での学び合い)

これらの姿はいずれも発達段階に応じて実践を通して身に付けられ、生涯を通じ生活にいかされる力を身に付けようとする姿である。技術・家庭科では、生活と社会との関わりを踏まえながら生活を総合的にとらえ、生涯を見通して生活をよりよくしていけるように、5年間の学習を統合し、これらの能力を育成するため、連続した学びを展開していくことが大切であるととらえている。

さて、この①～③の姿はいずれも将来の生活をよりよくするために必要な姿であり、その姿を支える能力の育成は重要である。特に①と②の姿はそれぞれが単独で実現するものではなく、お互いが関連し合いながら段階的に実現する姿(能力)である。そして③の姿は①②の姿を具現化する上で、より効果的に思考を広げ深め、意欲的に取り組むために関連し合う重要な姿となる。基礎・基本の習得についてはこれまでも様々な実践がなされてきた。しかしながらそれをいかに活用し課題解決の力を育成していくかという点について十分な検討がなされることは少なかった。また各種調査からも活用能力の不足が指摘されている。

三つの姿が関連し合いながら育成されることを勘案すると喫緊の課題である②の学びの姿を中核として、能力の育成を図る必要がある。そこで②の「基礎・基本の活用と課題の解決」を今次研究における中心的な「豊かな学びの姿」ととらえ、これに必要な「思考力・判断力・表現力」、いわば「工夫し創造する能力」の育成を中心的な課題としてとらえることとした。そして、これらの豊かな学びにより子どもたちは、生活と技術との関わりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てることができるととらえた。

2 技術・家庭科における思考力・判断力・表現力とは

技術・家庭科で学習したことが実際の生活でいきわたる力となるためには、将来にわたって変化し続ける社会に主体的に対応し、生活を営む上で生じる課題に対して、自分なりに判断して解決することができる能力が必要である。この能力を我々は「生活を工夫し創造する能力」ととらえ、課題を解決するまでに段階的に関わる能力すべてを含んだものととらえた。それは例えば、課題に対して様々な角度から考える思考力、その思考力を総合して解決を図る判断力、判断した結果を的確に示すことのできる表現力等があるととらえた。このことから技術・家庭科における思考力・判断力・表現力は、「生活を工夫し創造する能力」と考える。

これらの力の育成には、自らが課題を発見し、習得した知識及び技術を活用し、解決のための方策を探るなどの学習や活動等を、発達段階に応じて繰り返し行っていくことが大切である。11年間を通して生活をより豊かにするために、生活の中から課題を発見し、自分の知識や技術を活用して課題を解決していく力を身に付けさせなければならない。

思考力・判断力・表現力、いわば「工夫し創造する能力」の伸長を見るとき、考えを練りあう過程において、話し合いのようすや発言をもとにした授業分析、ワークシート、計画表などを通して評価した。ワークシートや計画表等は最適解に至る経緯が記述できるように設計し、その自己決定の理由が一定の根拠に基づいて合理的に記載(発表)されることで力の育成を見る。その際、題材全体の評価規準表を活用するが、そこに評価の基準となる視点を明確に設定することが重要である。しかしながら様々な思考や判断の過程を定型的な評価規準(視点)で判断することの妥当性については、さらに十分な検討が必要である。

3 思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 学びをいかす

技術・家庭科において学びをいかすとは、学びを子どもの実生活により強くつなげていくことであると考えた。またこれは豊かな学びの姿に直接つながり、自らの学びの中での課題を解決し、それを自らの生活によりよく返していく営みであるにとらえている。

学びがいかされることにより、変化の激しい現代社会においてその変化に主体的に対応し、技術を適切に評価活用したり、生活を展望し主体的によりよい生活を工夫できる能力が育成される。

(2) 学び合い

実践的・体験的な学習活動を通じた問題解決能力の育成が、基礎的・基本的な知識・技術を活用し生活を工夫し創造できる能力（思考力・判断力・表現力）の育成につながる。これまでの実践から以下のような取組により効果的な学び合いによる学習活動が図られ、工夫し創造する能力の伸長につながるととらえた。

① 題材の工夫 ～身近で工夫し創造しやすい生活課題を設定する～

身近な生活の中から課題を発見し追求していくことで、解決方法やその取組の手順をイメージしやすく、学び合いをより具体的な視点で円滑に進めることができる。これは子どもたちの実際の生活につながっているものであり、当然成長に応じた段階的なものである必要がある。さらに、身近な生活につながる課題であることは、課題を解決することが直接生活に反映されるため、学びをいかすという視点からも外すことができない。

② 展開の工夫 ～課題解決学習の構造を明確化する～

課題解決学習の過程を、「課題の設定」「計画」「実践」「評価・改善」の一連のサイクルとし、その内容を明確にした上で全体のサイクルに応じた学び合いを意図的に組み込んだ。学び合いを通じて解決に向かい試行錯誤したり課題を共有化し学級全体で追求したりする取組を意図的に繰り返し実践することでより工夫し創造する能力が育成されることが考えた。

これらの取組を通し、学び合いにはいくつかの形態・段階があり、その段階を追って高まっていく姿を見ることができる。具体的には①既習の基礎・基本の学習内容に基づく学び合い、②教師のはたらきかけによって思考が広がりあるいは深まり、これまでの学習内容から離れて高まっていく学び合い、③教師から離れ子どもたち自らがはたらきかけ合いながら高まっていく学び合いである。発達段階や学習内容に応じて段階的に学び合いの取組を組立てることが大切である。

(3) 教師のはたらきかけ

① 子どもの思考を揺さぶる工夫を行う

課題の視点を明確にして、教師のはたらきかけにより子どもの考えを広げることや焦点化することで思考を揺さぶる場面を構築する。さらに、教師のはたらきかけにより揺さぶられた思考を自分自身が俯瞰するために、自分の思考の過程を振り返ることができるようワークシートを工夫したり、グループ協議の経過が分かるようホワイトボードを活用したりするなどの工夫も大切である。これらの思考場面では個・グループ・学級全体など、集団や個を行き来しながら展開することで学び合いの深まりを図っている。

② 段階的に課題解決を繰り返す

子どもの今や将来の生活・実社会での実践に向けて学びがいかせるよう、さらに具体性やいかすための視点をもたせた課題を設定し、段階を追って複数回課題解決を行う。これは前述した、学び合いの段階を追って高めていく取組であり、初期の課題解決は基礎・基本の学習内容に基づく学び合い、次段の課題解決は思考を広げ、深め、はたらきかけ合いながら高まっていく学び合いが展開される。同じ課題をより深め広げながら学び合いを重ねるために、子どもの思考はより揺さぶられる機会が多くなる。

初等部後期から中等部まで一貫した題材や課題を考えたとき、子どもたちの発達段階を十分に踏まえ生活にいかす姿とはどのようなものか具体的にとらえておく必要がある。つまり同じような学習内容であっても生活へのいかしかたは発達段階に応じて当然異なってくるであろうし、それに伴って思考を揺さぶるための課題も変わってくる。同時に評価規準の設定にもつながることであり、その妥当性を十分に吟味し課題を設定していく必要がある。

(文責 後藤 康太郎)